

令和7年度第1回秋田県立近代美術館協議会（要旨）

日 時： 令和7年7月18日（金） 13：30～15：00

会 場： 秋田県立近代美術館 研修室（6F）

出席者	会長	打川	敦子	横手市観光推進機構理事長
	副会長	岩野	玲子	横手市立横手南小学校長
	委員	阿部	順一	日本放送協会秋田放送局長
	〃	黒木	健	東北芸術工科大学非常勤講師
	〃	齊藤	千秋	株式会社秋田ふるさと村営業部副部長
	〃	佐々木	美香	SCENT OF BEAUTY
	〃	三戸	忠洋	株式会社秋田魁新報社文化部長
	〃	鈴木	竜典	R-r o o m鈴木竜典写真室代表
事務局	糸田	和樹	秋田県教育庁生涯学習課学芸主事(兼)社会教育主事	
〃	仲町	啓子	秋田県立近代美術館 特任館長	
〃	土門	高士	〃 副館長	
〃	高久	豊	〃 総務チーム副主幹(兼)チームリーダー	
〃	照井	裕奈	〃 主任	
〃	須田	愛美	〃 主事	
〃	木村	雅洋	〃 学芸チーム学芸主事(兼)チームリーダー	
〃	秋田	達也	〃 副主幹(兼)学芸主事	
〃	保泉	充	〃 主査(兼)学芸主事	
〃	藤井	正輝	〃 学芸主事	
〃	北島	珠水	〃 〃	
〃	奈良	香京	〃 〃	
〃	鈴木	京	〃 主査(兼)学芸主事	

<次第>

1. 開会
2. 任命書交付
3. 特任館長あいさつ
4. 委員・職員紹介
5. 会長あいさつ
6. 協議
 - (1) 令和6年度近代美術館事業の概況について
 - (2) 令和7年度近代美術館事業の概要について
 - (3) 令和7年度特別展の概要について
 - (4) 令和7年度教育普及・事業等の概要について
 - (5) 特別展・企画展・コレクション展アンケート集計結果について
 - (6) 令和7年度あきたMuseum機能強化事業「Museum特別展充実事業」の外部評価について
 - (7) その他
7. 閉会

<協議概要>

- 令和6年度展覧会について
 - ・ ジブリ展は圧倒的集客力と来場者層の広さが印象的だった。隣県からのアクセスに優れた立地が最大限に活かされた。特に、普段ふるさと村で見られない若い男女層が多く来場し、今後のリピートにつながる良い結果となった。冬期は例年除雪しない範囲まで除雪したことも大きな効果があったと思う。
 - ・ ジブリ展会期中、市内の飲食店の売上げが伸び、終了した途端にぐんと落ちたと聞く。今後も市内経済に貢献する企画を期待している。

- ・ ジブリ展をきっかけに美術館を知った人が多く、美術館が「楽しい場所」と認識され、結果、来館者が美術作品にも触れる機会が増えた。
- ・ 新版画展は満足度の高い展示だったが入館者数が伸びなかったという。現在版画を題材にした大河ドラマが放映されているため、今年開催したら違ったのではないかと。
- ・ キンビコミュニケーターについて、当初は多くの参加があったが、徐々に人が減った。「笑う！はひふへほ展」のアンケートから満足度の高さがうかがえるが、最後まで一緒にキンビコミュニケーターとして展示を作り上げられたら、さらに良かったと思う。視覚に障害がある方への鑑賞支援は、誰もが楽しめるものとなりとても良かった。今後も様々な立場や環境の方が訪れやすい場所となる企画を続けて欲しい。

→今年度はキンビコミュニケーターの自己実現の場となることも目標としたい。聴覚に障害のある方々が互いに思いを伝え合い、鑑賞を深められる場の実現も目指す。

- ・ 「笑う！はひふへほ展」では、展示室で寝転がるというユニークな体験ができ、子どもはもちろん大人も自由に楽しめとても印象的だった。

●令和7年度展覧会について

- ・ 横手市特別協賛により、小学5、6年生および中学生全員に入場チケットが配布された。加えて、セカンドスクールの利用や、学校司書が校内に設置した「エジプトコーナー」が生徒たちの興味を深めた。この連携により、美術館で得るものが広がっていくことを実感した。
- ・ 学校司書が展覧会に合わせた「エジプトコーナー」を設けたことを参考に、秋田県内図書館全体に広げられないか。近代美術館と県立図書館が連携し、県立図書館から各図書館へ情報を提供することで、司書も企画を立てやすくなると思う。
- ・ ジブリ展以降、新規の団体利用が増え、近代美術館の敷居が低くなりつつある。特にエジプト展開催中は、過去に例がないほど多くの学校団体が来館した。
- ・ かがくいひろしの世界展では「写真撮影・おしゃべりOK」と案内していて、とても良い。普段の展示でも特定の時間帯を設けて「おしゃべりOK」のイベントを開催するのはどうか。例えば、エジプト展について自由に語り合いたい人が集まり、感想を共有できる場を設けることで、多様な楽しみ方ができると思う。

●その他

- ・ 入館者数及び入場者数について目標と実績の乖離が大きい。目標人数をどのように設定しているのか知りたい。

→県の新秋田元気創造プランの指標数値を基本に、過去の実績や展示規模を加味して目標人数を算出している。

- ・ これまでも様々な方法で展覧会の魅力を発信してきたと思う。さらに、特にこれまで美術館に来たことがない人にその魅力を伝えるため、他の発信方法を検討する余地はないか。例えば SNS のさらなる活用などが考えられる。展示情報をより多くの人に届ける工夫を、今後も検討して欲しい。
- ・ 最近の中高校生の興味関心は映像が中心である。今後、創作体験を検討される際は、映像を扱うプログラムを取り入れれば集客力の向上につながる。例えば、映像作品を製作する活動や、何かを制作した後にそれを映像化する活動など、中高生はそうした活動を得意としているので、ぜひご検討して欲しい。
- ・ 美術大学や県内高校の美術部の作品を一堂に集めた展示を企画してはいかがか。美術館で作品を展示することは、学生にとって大きなモチベーションとなり、一般の来館者にとっても興味を引くきっかけになると思う。

- ・ 観光的視点からすると、体験型のコンテンツやガイド付きのツアーが人気。美術館でもギャラリートークを充実させたり、告知を強化して集客につなげたりするのが良い方法だろう。また、バックヤードツアーなど普段見られない裏側を見せることで、普段美術館に来ない層の関心を引き、美術館へのハードルを下げ、来館者を増やす効果が期待できる。
- ・ アンケートで「私語が気になる」という意見があるが、私語は必ずしも悪いものではない。騒がしいのは問題だが、「私語禁止」だと、自由に感じ、味わう気持ちを妨げる。近年の美術館は、鑑賞者の多様な解釈を目指す「対話型鑑賞」へと変化しつつある。海外の美術館では、子どもたちが意見を言い合う姿が見られる。「静寂」というルールを見直し、静かに鑑賞したい人と、感想を語り合いたい人が共存する方法を考えることが、多様性を包括する美術館づくりになるのではないか。
- ・ 静かに鑑賞したいという方も、感動をその場で誰かと分かち合いたい方もいる。美術館の「静かにしなければならない」というイメージが、美術館の敷居の高さの要因かもしれない。展覧会の目的と方法を来場者に事前に伝えるのはどうか。会話OKという案内を掲示することで、客も納得して鑑賞でき、気持ちよく過ごせると思う。
- ・ 集中して鑑賞したい方には、音声ガイドがあると良い。コストや手間がかかるが、例えば美大生に協力を依頼するなど、より多くの人が快適に鑑賞できるよう、工夫の余地はある。
- ・ 車社会のこの地域では、保護者の送迎が必要となり、学校帰りに気軽に立ち寄ることは難しい。学生が学校とは違う居場所として立ち寄れるような取り組みや、多様な鑑賞ニーズに対応し、皆が気持ちよく過ごせる工夫が必要だろう。例えば、座って鑑賞できるスペースを設けたり、鑑賞後に感想を自由に話せるようなカフェスペースなどがあると良いのではないか。